KOBE UNIVERSITY RESEARCH CENTER FOR URBAN SAFETY AND SECURITY

神戸大学　都市安全研究センター

第 6 回震災復興・災害科学 シンポジウム

2026 年 1 月 24 日（土）13:00 － 15:50

オンライン開催

神戸大学 都市安全研究センター

https://www.rcuss.kobe-u.ac.jp

プログラム

13:00 - 13:05　開会挨拶　滝口　哲也 神戸大学都市安全研究センター センター長

特別講演 (発表 30 分、質疑 10 分)

13:05 – 13:45	人口データに基づく災害復興過程の把握 奥村　誠　東北大学 教授 災害科学国際研究所　教授 大学院工学研究科土木工学専攻，東北アジア研究センター
13:45 – 13:55	休憩

令和７年度公募研究発表 (発表 20 分、質疑 5 分)

13:55 – 14:20	九州弧で発生する深い地震による特異なゆれ：異常震域のミニチュア版 筧 楽麿　神戸大学大学院理学研究科 助教
14:20 – 14:45	能登半島地震被災地学校の早期再開と学校避難所利用に関する考察 桜井 愛子　神戸大学大学院国際協力研究科 教授
14:45 – 14:55	休憩
14:55 – 15:20	マリンハザード研究　～南海トラフ地震に伴う阪神港における津波の特徴～ 林　美鶴　神戸大学内海域環境教育研究センター 准教授
15:20 – 15:45	阪神・淡路大震災の記録と歴史実践―震災資料を通じた当事者・非当事者の相互行為― 吉川 圭太　神戸大学大学院人文学研究科 講師
15:45 – 15:50	閉会挨拶　橘 伸也　神戸大学都市安全研究センター 副センター長

講演要旨

特別講演

人口データに基づく災害復興過程の把握

奥村　誠　東北大学 災害科学国際研究所　教授
大学院工学研究科土木工学専攻，東北アジア研究センター

自然災害への対応や備えを考える上で，住宅やインフラの物理的損傷だけではなく，それによって都市の人々の活動がどの程度妨げられたのか，それはどのような速度で回復していったのか，というレジリエンスへの注目が集まっています. ここでは, 近年利用できるようになった携帯電話位置情報に基づく人口データなどを利用して，災害の影響と復興過程の実態を定量的に把握し，レジリエンスを把握する研究をいくつか紹介します。

公募研究発表

九州弧で発生する深い地震による特異なゆれ：異常震域のミニチュア版

筧 楽麿　神戸大学大学院理学研究科 助教

2006 年に大分県西部で震源深さが 145km と非常に深いスラブ内地震が発生しました。通常の場合，地震によるゆれは震央付近でもっとも大きなゆれが観測され，震央から離れるに従ってゆれが小さくなります。しかし，この地震によるゆれの加速度の分布を，九州，中国地方，四国を含む広い範囲で見ると，大きな加速度が観測される領域が震央の東側に偏って広がった，特異なゆれの分布が見られます。九州弧で発生した深さの異なる他の地震によるゆれの特徴も検討しつつ，この東側に偏った特異なゆれと島弧の地下構造との関連について考察します。その結果，この特異なゆれは，言わば「異常震域のミニチュア版」として理解できることがわかります。

能登半島地震被災地学校の早期再開と学校避難所利用に関する考察

桜井　愛子　神戸大学　大学院国際協力研究科 教授
東北大学　災害科学国際研究所 教授（クロスアポイント）

本研究では、2024 年能登半島地震の被災地の学校における発災後の学校による対応と、学校教育の再開までの過程を現地での学校関係者等のインタビューから明らかにした。自治体の規模、学校や地域の被災状況によって、避難所運営をめぐる多様な対応と学校再開過程が示されたが、災害後の本格的な教育再開には時間を要したものの、こどもたちの日常性の回復のために学校という子どもの「居場所」の早期再開をいかに確保するかが最も重要であることが共通点として再確認された。

マリンハザード研究　～南海トラフ地震に伴う阪神港における津波の特徴～

林　美鶴　神戸大学内海域環境教育研究センター 准教授
(兼)大学院海事科学研究科・海洋政策科学部

船舶の津波対策には、利用港湾での津波情報が必要である。過去に実施した南海トラフ地震に伴う大阪湾での津波計算結果から、阪神港における津波の特徴を定量化した。津波第一波による高波高域は、地震後約 50 分に紀淡海峡を抜け、西回りに神戸区へ約 90 分後に到達する。一方、東回りに堺泉北区へ約 110 分後に到達する。堺泉北区は「大きな水位変動と強流」、大阪区は「強流」、神戸区は「局所強流」、尼崎西宮芦屋区は「比較的穏やか」という特徴を持つ。

阪神・淡路大震災の記録と歴史実践―震災資料を通じた当事者・非当事者の相互行為―

吉川　圭太　神戸大学大学院人文学研究科 講師

神戸大学人文学研究科地域連携センターでは、震災資料に関わる諸機関・市民グループと連携し、その保存・活用研究を進めている。震災を知らない人びとが増加する現在、震災経験をいかに歴史として把握し、継承するかが課題である。本報告は、学生とともに取り組んだ資料分析や展示作成事例を通じて、震災資料を媒介とした「当事者」と「非当事者」の相互行為が持つ意味について言及し、その歴史実践の可能性を提示する。